ボグド・ハーン政権成立時の東部内モンゴル人の動向 －バボージャヴを例として

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>烏 蘭塔娜</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>東北アジア研究</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>－</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>－</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2008年</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10097/00107709">http://hdl.handle.net/10097/00107709</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
ボグド・ハーン政権成立時の東部内モンゴル人の動向
—バボージャヴを例として

The Response of Eastern Inner Mongolians to the Establishment of Bogd Khan Government
— The Case of Babujab

烏蘭塔娜 (Ulantana)*

キーワード：バボージャヴ、内モンゴル、ボグド・ハーン政権、トゥメド左翼旗
Keywords: Babujab, Inner Mongollia, Bogd Khan Government, Left Wing Banner of Turned

問題の所在

1911年12月、外モンゴルの活仏ジェヴツングダムバ・ホトクト、ハルハ王公や内モンゴルの官吏ハイサンらは、フレ（現在のウラアンバートル、ボグド・ハーン政権の首都）駐箚の辺事大臣三多を追放し、独立を宣言してボグド・ハーン政権を樹立した。この独立運動は外モンゴルに留まらず、内モンゴルなど、清朝支配下のモンゴル人を統合した「大モンゴル国」の樹立を目的としており、内モンゴル諸盟旗にも独立モンゴル国への合流を呼びかける檄文が送られた。

ボグド・ハーン政権からの合流の呼びかけに対して、内モンゴル諸盟旗の反応は様々だった。当時内モンゴル49旗中の35旗が帰順の呼びかけに応じたというが(注1)[マグサルジャヴ 1925-1927:36]、多くは中華民国との間で去就をあいまいにしたまま観望したのである。その中で最も早く外モンゴルの独立運動に呼応したのが内モンゴルのジリム旗のトクトフ、ジャ正しいのハイサンであり、ジリム旗右翼前旗ジャサブ・ウタイとジリム旗右翼後旗ジャサブ・ラシモンジュールは武装蜂起を起こしている。さらにジョーノダ盟の開魯県でも蜂起が起きている。


バボージャヴがほかの上記の内モンゴルの人々と異なるのは、彼が早くから日本と深い関係を持ち、その大陸政策に深く関わった点である。それゆえ日本側においても彼は古くからよく

* 東北大学環境科学研究科博士後期課程
ボグド・ハーン政権成立時の東部内モンゴル人の動向

知られた人物であった。バボージャヴは1904年日露戦争の時に日本側の満洲義軍に召募されて、日本側に協力していたのである。日露戦争後は、「其生まれ故郷たる彰武県の巡警局長に任用せられ…」[黑木会1966:中,626]た。彼の「生まれ故郷」とされる彰武県とは、清代内務府の牧廻であった養息牧廻、すなわちスレグ旗に1903年に設置された県である。バボージャヴはトゥメド左翼旗の出身であったが、10歳の頃にスレグ旗に移住したのである。後彰武県は、新民府に属し、奉天省の管轄下に置かれた。彰武県で巡警局長職を務めていた時期のバボージャヴに関する情報はまだ見つかっていないが、その後、再びその名が史料に現れるのは、1912年

1911年末にボグド・ハーン政権が樹立され、内モンゴルを含むモンゴル各地に合流を呼びかけると、彰武県で巡警局長を務めていたバボージャヴは、これに加わるために、翌年8月ごろに部下と家族を連れて彰武県から逃げ出し、プレーに赴いて、政権から鎮国公に封じられたとする。

本論文では、バボージャヴが最初にプレーに赴いた経緯に着目してみたい。それは以下のようない謎解による。

上述のように、1912年のボグド・ハーン政府成立時、バボージャヴは奉天省轄下の彰武県巡警局長という地位にあった。従来の理解ではバボージャヴは彰武県から「逃亡」し、直接プレーに赴いたことになっており、自国のジャサグや王公の紹介を得たような事実も知られていない。そのバボージャヴが、外モンゴルの独立に加わるために、突如彰武県から逃げ出し、プレーに赴いただけで、直ちに歓迎を受けて鎮国公の爵位まで与えられるという破格の待遇を受けけるというのは非常に不可解に思われる。彼が馬賊の頭目として、また滿洲義軍における日本への協力者として日本側に知られていたのは事実としても、彼自身はトゥメド左翼旗の一旗民に過ぎない。彼はハイサンのような旗官員でもなく、またトクトフのような反満蜂起の領袖であったわけではないのである。

また、ボグド・ハーン政権は、内モンゴル各旗のジャサグ宛に檄文を出したが、盟旗の行政組織に属したわけではない。奉天省轄下の彰武県巡警局長にも檄文が届けられたとは考えにくい。つまり、政権とバボージャヴの間の接点が見えないのである。

このように、彰武県巡警局長バボージャヴのボグド・ハーン政権との接点や、そのプレー行の経緯は不明瞭であるため、本論文ではこの問題を中心として考察する。それは、バボージャヴがプレーに至るまでの経緯が、その後の彼の独立運動における一連の活動の基礎となるからである。

本論文では、日本外交文書及びモンゴルの文書史料を用いて、従来の知見を踏まえつつ、バボージャヴのプレー行の経緯を明らかにすることを通じて、ボグド・ハーン政権成立時の内モンゴル人動向の一端を明らかにしたい。
1．バポージャヴの活動について

バポージャヴは1875年生まれの内モンゴル・ジョコト盟トゥメド左翼旗（モンゴルジン旗、今の中ロ隣省阜新市）の人物である。同旗の人口はトゥメド右翼旗とともに外藩モンゴルの中でもっとも多く、柳条辺境を挙げて、遼寧省の黒山県と接している [ポルジギン・ブレンサイン 2007:330]。10歳頃に彰武県に移住して、その後、早くも日本側に知られ、日露戦争の時に日本の満洲義軍に参加して、日本に協力した。戦後は、日本側の斡旋で、彰武県の巡警局長に任命された。1911年末にポグド・ハーン政権が樹立され、内モンゴルを含むモンゴル各地に合流を呼びかけた。彰武県で巡警局長を務めていたバポージャヴは、これに加わるために、1912年8月ごろに部下と家族を連れて彰武県から逃げ出し、プレーに赴いて、政権から郷公に封じられたとされている。

1912年11月の露蒙協約締結により、ロシアの援助を得たポグド・ハーン政権は内モンゴル統合の具体的計画を実行に移し、1913年の1月から、内モンゴルの五つの方面に軍隊を派遣した。バポージャヴは東南方面的指揮官に任命され、民国軍と戦った功績により、東南辺境モンゴル人鎮撫官兵総督大臣ショドルグ・バートル世襲鎮国公（Jegün emün-e kiyayar-un monguulčid-i tübsidken toquniyulqı täsimel čerig-i yerüngkeyilen jakirqu sayid siduryu bayatur üy-e uların jalyamjilaq ulus-un tüisiy-e gęng）に封じられた。

しかし、1913年10月の中露宣言により撤退を求めるロシア側の圧力と武器の窮乏から、政権は軍隊を引き揚げるを得なくなり、モンゴル問題はキャフタでの三国会談で解決されることになった。しかし、バポージャヴは自軍を引き揚げることなくハルハと内モンゴルの境界地方に留まり、キャフタ三国会談のなりゆきを見守っていた。会談の結果内外モンゴルの統合が否定されると、バポージャヴは日本から協力を得るために、日本へ部下を派遣した。これに直接協力したのが日本の大陸浪人米川浪人である。その目的はバポージャヴの擁する二千名以上の兵士を利用して、満蒙独立計画を実行することであったが、1916年6月に袁世凱が急死し、その計画は宙に浮いた。しかし、その時バポージャヴ軍は既に在地ハルハより奉天に向かって進行中だった。郭家店に到着した時に日本側に撤退を命じられ、撤退途中林西県で民国軍に攻撃され、戦闘中に撃たれて戦死した。

バポージャヴの活動について、モンゴル側では1913年のポグド・ハーン政権の南進軍参加、日本側では満蒙独立運動時の行動が注目され、研究されてきた。

バポージャヴの事績に関する研究は、従来、柏原孝久、瀬田稔一『蒙古地誌』（1919）、黒龍『東亜先覚志士紀伝』（1966）、日本外交文書などの日本側の史料や、陳銘の『止罪筆記』（1968）、盧明輝『巴布扎布史料選編』（1979年）、とくにこれに収められたバポージャヴの三男ジョンジュールジャヴ（正珠爾扎布）の回想録「巴布扎布事略」などの中国側の史料によっていたが、近年ではモンゴル国立中央アルヒーフ所蔵のバポージャヴ関連文書が利用されはじめ
ボゴド・ハーン政権成立時の東部内モンゴル人の動向

モンゴル国立中央アルヒーフ モンゴル Uulsyn Udanzny Tuv Arhiv（略語MUYTA）は17世紀から20世紀までの文書史料を所蔵しているモンゴルの代表的史料館で、1990年代に公開され、所蔵史料を閲覧することができるようになったため、それを利用した研究論文もいくつか発表されている。また、同アルヒーフ所蔵の史料集が同国からいくつか出版されている(注3)。これにより、これまで日本・欧州・中国のものに限られていたボゴド・ハーン政権時代のモンゴルに関する史料情況が改善され、研究の視野が一層広がった。勿論、ボゴド・ハーン政権と深い関係を持っていたバポージャヴ関係の文書も数多く保存されている。

一方、日本では、2001年に開設されたアジア歴史資料センター（注4）ホットペインジにバポージャヴを含むモンゴル関係の史料も数多く収録されている。今回利用する史料は、日本外交文書、主に、当時日本外務省及び日本軍が現地に情報員を派遣して収集してきた間接情報及び、モンゴル国立中央アルヒーフ所蔵の本人による呈文である。

2. バポージャヴのプレー行に関する従来の知見
従来のバポージャヴのプレー行の経緯の理解は、ジョンジュールジャヴの回想によるところが大きい。ジョンジュールジャヴはバポージャヴの三男で、父親のプレー行に参加した当事者である。彼は1916年の父の死後、日本の陸軍士官学校に学び、満洲事変に際しては、モンゴル独立軍の創設と蜂起に中心的役割を果たし、満洲国建国後は満軍の将軍となった。戦後はソ連軍に捕虜として抑留され、中国への送還後、1963年に釈放された。この回想「巴布扎布事略」は釈放後に書かれたものである。しかし、当事者と言ってもジョンジュールジャヴは当時7歳だったため、その内容の信憑性には疑問が残るのであるが、従来バポージャヴのプレー行の経緯を明らかにする史料が他に存在しなかったのである。


…1913年のある日の深夜、バポージャヴは3、40名の部下及び妻子を連ね、大冷営子（彰武県の北60里）より逃げ出して、モンゴル独立に参加するために、大庫倫（今のウランバートル）に向かった。私（ジョンジュールジャヴ）はその時七歳だったので、家から出たときの情景は頭にぼんやり残っている。その夜、家族全員が突然七匹の馬に引かれる馬車に乗って、布団を被って、大門を出た。村には犬の吠える声がした。そして前にも後にも騎馬の人が護衛していた。その夜は、霧が非常に濃かった。走り出してまもなくある人が「軍隊が追いかけてきた」と言ったので、私（ジョンジュー
ルジャヴ）はすごく怖がった。どのくらいの道をどれだけ遠くまで走ったか分かりならない。ようやく金龍鎮（その後経過したところは、はっきり覚えていない）に到着し、何日間か留まって、その後に西北に向かい、ナイマン旗、ジャロード旗、アルホルチン旗、東西ウジェムチン旗、アヴァ旗、ホチト旗などを通過し、家族をホチト旗に留めて、バボージャヴを軍隊で連れて、大庫倫に赴いた。途中漢人の軍と何回か戦ったが、一番激しかったのは、エグゼル廟の戦いであった。

大冷営子より出発した後、途中モンゴル人がバボージャヴが大庫倫へ赴き、モンゴル独立に参加すると聞いて、多くの人が先を争ってついて来て、庫倫に到着した時には二千人以上に達していた。

バボージャヴは、ジェグツンダンパボトクト及びその大臣らの歓迎と歓待を受け、当時の大庫倫政府から鎮東将軍、鎮国公等の爵位を与えられた。大庫倫に一年以上住んだ後、部隊をつれてハルハ河沿岸に二年あまり駐屯し、軍隊の訓練及び整頓をしていった…

この回想からは、バボージャヴのプレー行について以下のような理解が得られる。第一に、バボージャヴは、1913年のある深夜、夜陰にまぎれて彰武県から「逃げ出した」という。第二に、逃亡は「モンゴル独立に参加するために、大庫倫（今のウラーンバートル）に向かった」ものである。第三に、途中金龍鎮、ナイマン旗、ジャロード旗、アルホルチン旗、東西ウジェムチン旗、アヴァ旗、ホチト旗を経由し、家族をホチト旗に留めて、バボージャヴは軍隊をつれて、大庫倫に赴いた…途中漢人の軍と何回か戦ってプレー到着時には２千人の軍を率いていたこと。第四に、到着後バボージャヴはポグド・ハーン政府から「歓迎と歓待」を受け、「鎮東将軍、鎮国公等の爵位を与えられた」という。


第二の問題は、彰武県から逃げ出して、「モンゴル独立に参加するために、大庫倫（今のウラーンバートル）に向かった」という記述である。

ジョンジェールィジャヴの回想録を用いた盧明輝氏は、バボージャヴのプレー行の経緯について「1912年の8月部下3、40名及び家族を連れてある夜中に、スレグ旗より逃げ出して、フ
ボギド・ハーン政権成立時の東部内モンゴル人の動向

レーに赴いた。途中「紅胡子」を招いて、党衆2千人ぐらいを集めて、1913年の春にプレーに到着した。そして、ジェヴツィンダナに鎮国公に封じられた」[盧明輝 1979:2]と述べている。中見氏も盧明輝論文を参照しつつ、バボージャヴが「家族、信奉者らと共に新改革県から逃げ出して、ボギド・ハーン政権に赴いた」[Nakami 1999:139]と直接プレーを目指したものとする。

一方モンゴルの研究者ジャムサラン氏は「…バボージャヴは身辺の友人らどうするべきかを相談して、1912年9月8日の夜部下60人連れて故郷より密かに出て、プレーに向かう途中、プレーと意見が一致する内モンゴルのいくつかの地域を経由し、ボギド・ハーン政権に帰順希望している兵士らと合流して、途中一営長になり、中国軍と何回か戦って勝って、プレーに兵士らと到着し、モンゴル官員らに歓迎されて、鎮国公に封じられた」[Жамсаран 1996:57]と述べている。氏の叙述においては、出発当初の同行者60人余に達したこと、プレーに向かう過程で「営長」になったことが新しい知見として加わっている。

これに対して、ロンジド氏は「…1912年8月28日の夜、バボージャヴは親友及び意見が一致するレビスパヤル、レビスバハ（原語は tassibayu、タスジョヴォ）ツェンデバル、ボムブェジァヴ（原語には、bumba、ボムバ）らと一緒に両親、妻子、故郷を捨てて、故郷より出発し、ビント王旗の軍の協力ポンツォ格のところに行って、四等台吉ウルジオロシフ、フッチャン、チェルヴァイ（原語には庶民チェルヴァイ、qaraču ḳurbaı）ハスマートル等30人以上と面会して、ハルハで発生していることに関して相談しているときに、博王旗の権力者（erketen darqatan）らがボギド・ハーン政権に帰順しに行ったことを彼に教えて。バボージャヴこの情報聞いて、前に故郷より一緒に出た友人らの上にビント王旗からも兵士を召募して、同年9月19日にプレーへ出発したが、途中に駐在していた中国軍を警戒して、昼間隠れて夜中に行進して目的地に到着し、1912年12月31日にボギド・ハーン政権に呈文を呈示したり。」[Лонжилд 2002:3]とし、同志の名前やプレーに至るまでの経緯について、具体的かつ詳細な情報を示している。

これによれば、バボージャヴは彰武県より出発した後、直接プレーに向かったのでなく、ビント王旗に立ち寄った後、「博王旗の権力者」がプレーに帰順したとの情報を聞き、自らもプレーに行ったとしている。ここでは、バボージャヴのプレー行に「博王旗の権力者」なる人物が介在していることが伺われる。ロンジド氏の研究がバボージャヴのプレー行の経緯についてより詳細な情報を含むのは、氏がアルヒフ文書しかもバボージャヴ本人がボギド・ハーン政権に呈示した呈文を用いているからである。ただ氏はこの呈文全文のテキストを提示しているわけではないが、一部を利用したに止まる。

ロンジド氏が言及しているバボージャヴのプレー行に介在した「博王旗の権力者」に関連し注目されるのは、陳鉞の『止室筆記』が、「アルホア公の一営長としてプレーに行った」と記述している事実である(注3)。もしこれが事実ならば、ロンジド氏が指摘する「権力者」というのが、この「アルホア公」にあたると考えられる。『止室筆記』は中国、日本の研究者ら
東北アジア研究 第12号

によってすでに用いられてきた史料であるが、バポージャヴがアルホア公の一営長としてフレーに赴いたという点に着目したものはない。

第三の問題は、ジョンジェールジャヴの回想録に「金龍鎮、ライマン旗、ジャロード旗、アルホルチン旗、東西ウジャムチン旗、アヴァ旗、ホチト旗などを通過し、フレー到着時には2千人の兵を率いていた」とある点である。この回想録の紹介者盧明輝もこれにより、「匪衆2千人ぐらいを集めて、1913年の春にフレーに到着した」と述べている。ジャマルサパンも「フレーに向かう途中、フレーと意見が一致する内モンゴルのいくつかの地域を経由し、ボグド・ハーン政権に帰順を希望している兵士らと合流して、途中一営長になり、中国軍と何回か戦って勝って、フレーに到着した」と、フレーに到着時の兵士の数はあげていないものの、彼が途中各地で軍隊を集める、営長となり、実際に中国軍と戦闘を交えたと理解している。これが事実とすれば、バポージャヴがフレーに至る経緯は、中国軍に追われながらのフレーへの逃亡といいジョンジェールジャヴの回想の記述とはだいぶ異なるものとなる。

一方、ロンジド氏は「9月19日（新暦）日に首都フレーに向かって出発したが、途中に駐在している中国軍を警戒して、昼間隠れて、夜中に行進して目的地に到着した」[3.Лонжид 2002:3-4]と述べ、フレーに至るまでの経緯に関しては触れていない点も、氏がバポージャヴの呈文を用いていることを考えると不審に思われる。

第四の疑問は、「バポージャヴは、ジェッツンダンパ・ホトクト及びその大臣らの歓迎と歓待を受け、当時の大庫倫政府から鎮東将軍、鎮国公等の爵位を与えられた」という点である。

ボグド・ハーン政権が1911年12月に樹立されて以来、エグゼルホトクトを通じて、内モンゴル各旗に合流を呼びかけていた。しかし、バポージャヴはその時奉天管轄下にあった彰武県で巡警局長の地位にあり、その合流文書送付の対象になっていたかどうか疑問である。そのため、いきなりフレーに到着後、歓待をうけて、鎮東将軍、鎮国公に任命されたというのは不可解というしかなかろう。

以上、バポージャヴのフレー行に関する従来の理解からは、次のような疑問が浮かび上がる。

第一に、バポージャヴのフレー行は、本当にフレーを目指した「逃難行」だったのか、第二に、バポージャヴが数千に及び軍隊を集め、「営長」になることがどうして可能だったのか、第三に彼のフレー行に介していたらしい権力者とは何者かということである。

次章では、バポージャヴのフレー行に関する日本側の同時代の間接情報を検討したい。それは、当時日本は東部内モンゴルの動静に注目しており、特に以前からかかわりがあったバポージャヴに関する情報をも数多く収集していたからである。

3. 日本側の理解

外モンゴルでボグド・ハーン政権が樹立された直後から、内モンゴルの動静は日本に注目さ
ボルド・パーヴォ政権成立時の東部モンゴル人の動向

れていて、現地人を雇って内モンゴル各地の情報を収集していた。特に、ここで取り上げる新民府というのはジリム盟、彰武県から非常に近いため、この地域の王公らの動向に関する情報をよく把握しており、この日露戦争頃に日本と関係があった彰武県の巡警局長バボー・ジャヴァに関する情報も例外ではなかった。

バボー・ジャヴァの動向に関する最初と思われる情報は日本駐奉天兵野總領事代理より内田外務大臣宛大正元年（1912）10月1日の電報（注6）であった。

北條主任ヨリ左ノ通り

九月三十日彰武県ヨリ帰来セシ常務統裁支那ノ言ニヨレハ元蒙古馬賊ノ頭目ニテ後同地警備警官トナルシハ賊加浦（ババオチャプ）ナルモノ鳥泰王ノ蒙古独立ノ舉ヲ聞キ

九月初部下40名ヲ率ヒテ逃走シ多数ノ蒙古兵ヲ集メテ今や同地ニ侵入セントスルノ情報

ニ接シ奉天都督ハ九月二十七日巡防兵一営ヲ送リテ警備セシメ既ニ同地ノ北方「シヤリト」ニ進軍シ同地知縣ヲ亦同方面ニ向ヘリ為メニ人心懸恐クリ

この情報源とする「北條主任」とは、日本駐奉天兵野總領事館新民府分館主任北條太洋である。彰武県は新民府の西北110里に位置し、新民府の管轄下にあった。新民府には奉天總領事館の分館として新民分館が設置されており、彰武県の出来事は新民分館が注目していた。この情報が「彰武県ヨリ帰来セシ常務統裁支那ノ言」であるとされることからも、同館が直近の現地機関として情報を入手する位置にあったことが知られる。

この新民府が把握した情報で注目されるのは、彰武県警備警官バボー・ジャヴァの「逃走」が、ウタフ王の蜂起に加わるためだったとしている点である。中見氏[1979:146]によれば、ウタフ王はジリム盟右翼前旗のジャサヴァであり、1912年8月20日にジリム右翼後旗のランミンジューリとともに「東モンゴル独立宣言書」を発して蜂起を起こした。

バボー・ジャヴァ研究史に大きな影響を与えたジョンジュールジャヴァの回想録には、バボー・ジャヴァのプレー行の目的がウタフ王の蜂起に合流することだったとのようす文言はない。バボー・ジャヴァの動向に注目していたのは外務省の現地機関だけではなかった。当時四平衛駐在の宮内少佐は、1912年11月23日の参謀総長宛電報（注7）において、以下のように報告している。

諸情報ヲ綜合スルニ開魯県方面ノ蒙古軍ハ「バブチャプ」（人名）ノ率ヨリ約百五十ノ

騎兵ヲ中堅トシ多数ノ人民附和シアルカ如シ「バブチャプ」ハ日露戦時ソ時井戸川中

佐ノ下ニアリ戰後部下百五十ト共ニ彰武県附近ニ於テ巡警ヲ為リ居リシカ洮南方面ノ

騒擾ニ加ハル目的ニテ部下ヲ率ヒ脱出シ十月五日頃鎮東県ニ現ハレ支那兵ニ撃退セラ

レ其後消息不明ナルシ者ナル博王旗ノアルアルホア公賊ノ加ハリ在トノ話アルモ

疑ハレバ林ニ行ケリト云フ豊虜王ハ加ハリ在ルヤモ知レサリ、要スルニ洮南方面ノ騒擾

ニ此レ「バブチャプ」ノ加ハリ居ム蒙古軍ノ戰闘力大ナルモノト認ムルモ実力ヲ

取ルニ於テハ支那兵ニ鎮壓セラルナラナニ、小官ハ二十四日發鄭家屯ニ到ル

— 104 —
アルホア公(阿爾花公)ハ科尔沁部左翼後旗内ノ輔國公部属阿爾畢吉呼呼ラ
シヤオバエンバタ不名(小巴彦哈達？)
バブチャブ(巴布札布？)
鎮東縣ハ科尔沁右翼後旗即チ蘇郭公旗内＝在リ
洮南府＝属＝日府＝北方＝位置ス

上記史料は、バボージャヴガ彰武県から洮南の騒擾（ウタイ王の蜂起）に加わろうとして脱出したことでは前の新民府の把握していたバボージャヴの情報と一致する。そして、10月に鎮東県に現れて、中国軍に撃退されて、消息不明になって、その後11月に関東県の蜂起に加わったという新しい情報を含んでいる。宮内少佐は以上の情報を確かめるために鄭家屯に向かったのであった。

その後、参谋本部は11月28日に宮内少佐が鄭家屯巡警局長張篤福からの聞き取りとして報告してきた情報を、「蒙古情報第27號」（注8）として、12月5日に外務省に報告した。それによれば、

鄭家屯巡警局長ノ談話

小官ハ十一月二十四日四平街発鄭家屯＝至リ同地巡警局長張篤福ヲ訪問シ開魯県方面ノ状況及ノ関スル同人ノ意見ヲ聴取スル後ハノ如シ

イ、蒙古軍ノ兵力 開魯県方面ノ蒙古軍ハ初＝四千トノ報アリシモ其後確メ得タル＝因レハ千弱ノシテ重ナル頭目四アリ日クハト札ト日ク包金山（洮南事変＝於ケル蒙古軍頭目ナル）日ク「トレイミンウルチーダー」外＝名ナル阿爾哈瓦公ハ加ハリアラサル

ロ、関魯県及小庫倫失守ノ説、開魯県ハ小守ヲ失ヒタルモ其時日ハ二日ト雲ヒ五、六日ト云ヒ確実ナルスノ小庫倫ハ占領セレタリトノ説アリ＝此方面＝在ル蒙古軍ハハト札トノ率＝エルモノナルカ＝如シ

ハ、支那軍ノ行動、洮南ヨリ討伐ノ為＝歩隊ニ役、馬隊ニ役出動シタルトノ報アリ鄭家屯

ヨリハ兵ヲ出サソ行満陝＝ハハトヲ率＝彰武県方面ヨリ前進セルモ小庫倫ニ達＝シタルや

否＝不明ナル…

上記史料では、情報源が鄭家屯巡警局長張篤福であること、今回の開魯県の蜂起の頭領として参加していたのは4人であり、それはバボージャヴ、トゥメンウルジー、包金山ほか1名であり、アルホア公は関わっていないとしている。そして、ジリム盟左翼後旗のビント王の消息は不明であること、開魯県と小庫倫は陥落し、小庫倫を占領したのがバボージャヴであること、千人位のモンゴル軍を鎮圧するために民国側が軍隊を派遣したことが報告されている。

新民府の北条主任と四平街の宮内少佐の報告を比較すると、バボージャヴは洮南の蜂起（ウ
タイ王の蜂起）に加わるために彰武県から出発したという点で一致している。そして、宮内少佐の情報では10月初め頃にバボール・ジャヴァは鎮東県に現れて、その後消息がわからなくなったが、11月の開魯県の蜂起には一頭頭として加わっていたというのである。またアルホア公は今回の開魯県の蜂起に加わっていないとされる。

以上の報告を見て注目されるのは、開魯県の蜂起に関わって、バボール・ジャヴァの動向とともに、アルホア公なる人物の動静に関心が向けられている事実である。開魯県での蜂起について、在旅順紫少将の次長宛電報（注9）のうち1912年11月23日午前9時発の第二三十三号電報も、次のように述べている。

二十二日晩凌王ヲヨリ奉天ヲ帰着シタル密亀ノ報告、札幌特極内蒙独立軍ハ博王旗下アルホア公及びサヤオバア元大使ヲ首領トシ兵数ニ千、十一月十五日開魯、林西二縣ヲ占領シミト播摂奉天省ヨリ二十八師団歩兵ヲ、馬隊ヲイテ四箇小庫倫ヲ経テ開魯縣ニ向ヒミリト

ビント王府から奉天に戻ってきた密信の報告として開魯県の蜂起には博王旗のアルホア公及び「サヤオバア元大使」を頭領とした2千人の兵士らが加わっているというのである。

ここで「札幌特」とあるのは「札幌特」の誤りであろう。

一方、日本外務省側の在奉天落合總領事の1912年11月23日午前12時発内田外務大臣宛の第449号電報（注10）によれば、

…十一月二十二日信頼スヘキ情報ナリトテ守田大佐ヨリ通報シ来レル所ニ依レハ今回熱河方面ニ起リタル蒙人ノ南下ハ囊ニ漊南方面ニ起レルモノト其ノ軌ヲニシテ今回南下ノ蒙人ハ武裝セラレタル二千餘名ノ兵力ヲ有シ居リ囊ニ庫倫陸軍大臣ハ擬セラレタル博王旗ヲナルルハバ公及トセシニハノ義兄弟ヲ白絵ハ達等ヲ引率ジ十一月十五日開魯林西ニ二縣ヲ陥陷ヲシミト播摂ヲ極ム姜桂題ヘハ部ヲ提テテ通単ヨリ乗車山海関綽州間ニ下車十一月十七日十八日十九日ノ三日間ニ朝陽縣方面ニ向ヒトトモノ…

と、守田大佐の情報を信頼すべき情報として、外務省に報告している。その情報では開魯県の蜂起には、ポグド・ハーン政権の軍事大臣ハバ公（アルホア公）と陶寺陶（トクタン）の義兄弟が参加していたという。この情報源となる守田大佐とは、在四平街陸軍歩兵大佐守田利遠である。守田は、アルホア公の動静に関してそのフレー行きの時から把握していた。それは、1912年の4月16日付守田大佐から奉天総領事宛（注11）の報告にも伺われる。

博王旗下ノアリホア公ハ四月二日庫倫ニ向テシ事態シ其ヲ視察シ兼テ内外蒙古ノ連絡ヲ謀ニリアリト

これによるとアルホア公は1912年4月2日にフレーに向かい、その目的は内外モンゴルの連絡をはかるためであったとされる。そして、さらにアルホア公のこの後の行方に関し、大正元年9月16日付在奉天総領事代理領事天野恭太郎より外務大臣子爵內田康哉宛の文書（注12）は以
下のように報告している。

...博団下聯政情国公ミルアルハニ公ハ庫倫ヨリ反旗後直チ＝内モンゴル独立ヲ提唱シ兵
丁ノ募集＝着手セントセシモノ富厚漁等有力派ノ反抗＝遇其意ヲ果スサシテ今日ニ及
ヒ＝ニ次イ＝調南方面＝於ケル蒙古人ノ独立運動起ム其勢日々＝強大＝赴キツヲナルヲ見
遂＝家族及び旗下ノ兵丁若干（約五百トモ雲ヒ或ハ二百ヲハ百トモ雲フ）ヲ率ヒテ全地
ヲ発＝ニ向＝ヘリト

以上の情報源は、「在四平街守田大佐＝後任者下少佐」であり、これによれば、アルホア
公ハフロー＝矢戻って来て博王旗で従兵した兵士ら及び家族を連れて、洮南方面の蜂起に加わ
るため博王旗より出発して北に向かったこと、徴募した兵士の正確な数は不明だが、この情報
が出された9月16日にアルホア公は博王旗にすでにいないことが報告されている。

当時、日本駐奉天領事館からは鄭家駅及び洮南府に通信員を設置していて、東部内モンゴル
における王公らの動静に関する情報を収集していた。その情報源設置については、11月23日付
の在奉天落合総領事より内田外務大臣宛の電報（注13）に、

鄭家駅及び洮南府＝特別通信員設置ノ件＝ハ豫テ守田大佐＝人選方に依頼シ置キ其後モ数
回考究＝打合ヲ遂＝ゲタル所鄭家駅＝丈取調べ通信任務ヲ引受ケル相＝ノ人ヲ置キ、本官ノ
直属トシテ情報ヲ送ラシムルコトヲ目的トシテ...

と見え、奉天領事館の鄭家駅及び洮南府に設置された通信員は守田の推薦により設置されたも
のである。

以上の新民府、四平街の報告をまとめると、彰武県の巡警局長バボーチャはウタイ王の独
立に加わるために、9月にはすでに彰武県から逃走し、10月5日頃に鎮東県に現れ、その後一頭
領として11月のジョーダ盟開魯県の蜂起に参加していたこと、ジリム盟博王旗のアルホア公
は4月頃にフレに乗って、その後兵を徴募して故郷に戻ってきても、9月中旬頃に徴募した兵
士らとともに故郷より北へ出発して、11月の開魯県の蜂起に一頭領として参加していたことが
知られる。

一方、日本外務省より大正元年12月11日に欧米各国に駐在している大使に送られた「開魯縣
地方騒擾状況＝関スル件」（注14）には

本年十月末直隷省管下開魯縣（内蒙古達達達達達達達達達達達達達達達達達達達達達達達達達達達達達達
＝在リ＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝－107－
ポグド・ハーン政権成立時の東部内モンゴル人の動向

■（原文文字不明）陶什陶ノ義兄弟ナル小巴彦哈達（シヤヲバエンバタ）並日露戦後
当時我軍ニ於テ使用シタルコトアル布布札布（バプチャブ）（同人ハ戰後部下百余名
ト共ニ彰武県（哲里木盟科尔沁部察右郡王旗内＝在り）附近＝在リ同地方＝於テ巡警
トナリ居タルカ＝部下ヲ率ヒテ脱走シ十月初旬突然鎮東県（哲里木盟科尔沁右翼後
旗即チ蘇鄂公旗内＝在リ洮南府下ニ属シ同府ノ北方＝位置ス＝）＝現ハレ支那兵＝撃退
セラレシトアリ）等之ヲ引率スルモノノ如シ頭目中＝包金山（洮南府附近反乱ノ際
蒙古軍ノ頭目クリシ者）アリモ云フ…

とみえる。すなわち日本外務省が現地の各情報をまとめた結果として、開魯県の蜂起に参加し
た頭領は、ポグド・ハーン政権軍務省大臣アルホア公、ポグド・ハーン政権の軍務総司令トク
トフの義兄弟「シャヲバエンバタ」、日露戦争の時に日本側に協力していたポボージャヴ、洮
南の反乱のモンゴル軍の頭目包金山であり、「元札薩克図郡王鳥ケノ残党＝土匪ノ加担＝シタル
混合軍」としている。

以上の日本のポボージャヴに関する情報からは、従来のポボージャヴのプレー行の史料とし
て使われてきたジョンジュールジャヴの回想に記されたプレー行の目的とは、異なる理解が浮
上する。

ジョンジュールジャヴが「ポボージャヴは3、40名の部下及び妻子、子供を連れ、大冷宮子
より逃げ出して、モンゴル独立に参加するために、大庫倫に向かった」と直接プレーの独立に
加わろうとするのに対して、日本側の情報は「鳥ケノ蒙古獨立ノ掟ヲ聞キ九月初部下40名ヲ
率ヒテ逃走シ」として、直接プレーに向かったのではなく、ウタイ王のモンゴル独立運動に加
わるため、彰武県から逃走したとしている。

ジョンジュールジャヴはプレーに向かう途中経由した場所について、「金龍鎮、ナイマン旗、
ジャロード旗、アルホルチン旗、東西ウジェムチン旗、アヴァ旗、ホチト旗などを通過し、家
族をホチト旗に留めて、ポボージャヴは軍隊をつれて、大庫倫に赴いた」とするのに対し、日
本側の情報では「十月初旬突然鎮東県＝現ハレ支那兵＝撃退セラレシ」その後に開魯県の蜂起
を起こしたとする。

また日本外務省側の情報では、開魯県の蜂起の時にポボージャヴはアルホア公とともにいた
と理解している。そして最大の相違点は、ジョンジュールジャヴの回想が、ポボージャヴが直
接プレーに行ったとするのに対し、日本側の情報の中にはかかる理解は見当たらぬという点
である。

日本側が得ていた情報は、ポボージャヴはプレーに向かって逃走したのではなく、ウタイ王
の独立に加わるために鎮東県に現れ、撃退された後、開魯の蜂起にアルホア公とともに一頭領
として参加していたというものであり、彰武県からプレーに直接逃げ込んだものはしていな
い点を確認している。
次章では、モンゴル国立中央アルヒーフに所蔵されているバポージャヴァ本人からボグド・ハーン政権に呈した呈文を用いて彼のフレーバー行の経緯を検討したい。

4．本人の呈文

本章では、モンゴル国立中央アルヒーフ所蔵の文書を用いて、バポージャヴァのフレーバー行の経緯を検討したい。ここで用いるのは、バポージャヴァ自身がボグド・ハーン政府に提出した呈文、アルホア公ナスンアルビジフの徴募した官兵への恩賜要請を含む内務省文書、バポージャヴァとジトグルトがアルホア公ナスンアルビジフからの自立の許可を求めたことに関する総務省文書、及びアルホア公ナスンアルビジフによる部下ムルンガ、ガダガルの自立許可要請の呈文である。

4-1．バポージャヴァの呈文に見るフレーバー行の経緯

まず、バポージャヴァ自身の呈文は、モンゴル国立中央アルヒーフの総務省フォンドに1912年の「本国に帰順した人達及びそれに関する奏摺」（計27件）（tus ulus-tu dayagar-a oruysan kümüüs-ba tere tuqai qolbuydاغ nuylburi bişig-ūd）として登録されている27件の文書の第5件目として分類されているもので、黒墨で総37行にわたって記された摺子（nuylburi）である。

文書作成者は「ジョット盟盟長王、トゥメト左翼旗箭丁、メイレン・バポージャヴァ」とあり、宛先は「総務省、共財2年11月23日（新暦1912年12月31日）の日付がある。この文書はボグド・ハーン政権に帰順するまでの経過がバポージャヴァ本人の手によって記されている点で重要である。前述のように本文書はロジン氏によって一部が利用されているが、同氏はこれをバポージャヴァがボグド・ハーン政府に帰順を表明した文書であるとしている。[3.ロツィィタ 2002:3]

まずバポージャヴァは、文書冒頭で、

ジョット盟盟長王トゥメト左翼旗の箭丁メイレン・バポージャヴァが謹んで総務省に文書を呈して報告する件。卑かな私は自旗より出てきて旧スレグの新しい政府彰武県の地方を何年間か警備する職に就いていたが、

と記し、自分がジョット盟トゥメト左翼旗の属民であることを明らかにし、その上で帰順の経緯を次のように述べている。

我々の前清の政権を、狡猾な民人の官吏が党派を結成し、自ら国を樹立し、モンゴルに危機が起きた際、同年春に聞いたところによれば、政教に軌をもとに持つ我がボグド・ハーンが、モンゴル人に慈悲を垂れて、水火の苦難より救い出そうと、王座に即き、北方世界と命名し国家を樹立したため、私バポージャヴァは、副長テグスバヤル、タスショヴォ、チンドバラ、ブムバ達及び諸兵士達と共に相談し、それぞれ家族をすべて捨てて、本年7月16日（8月28日）の夜計60名程が家を出発して、ビント王旗の軍務協理ボツルボの家にいて、召集した四等台吉ウルジオールジフ、庶民チョルヴァ
ボグド・ハーン政権成立時の東部内モンゴル人の動向

イ、ハスバートル等30名余と合流していたところ…

これによると、バポージャヴは彰武県から直接フレーに赴いたのではなく、60余名の部下を連れて彰武県からピント王旗の協理ボンツォグのもとに行ったとしている。しかも、ピント王旗で30余名の兵士と合流して、既に90余名の兵士を擁していた。

さらに呈文には、
ボドルガタイ親王旗のアルホア公子がボグド・ハーンの教化に従い、勅命によって兵士を徴集し、首都フレーに赴くと聞き、本年8月初9日（新暦9月19日）に故郷より出発したので、ピント親王旗で面会し、ともに来た。途中以前官兵を指揮していたことや忠誠を考えて一営の長に任命されたが、私の本心はボグド・ハーンのために犬馬の労を尽くして、国民の一員としてささやかななり大応えて、身を犠牲にしても恨むところはない。衷心から人として生まれた目的を達成するために来たことを呈し申し上げる、慈悲により貴省よりご照覧し、ご指示を賜る。

このため申し上げた。

共戴2年冬中月23日（注15）（1912年12月31日）

と書かれている。

まず、ここで注目されるのは、バポージャヴが、ボグド・ハーン政権の命令で徴兵を行っていたアルホア公に召募され、営長に任命されたことによってはじめてフレーに向かったことが述べられている点である。

彼が営長に任命されたことについては、前述のように、ジャムサラン氏が、フレーに赴く「途中一営長に」なったと述べているが、どの誰の営長になったのかは明示していない。ロングド氏は、「博王旗の権力者」としているが、名前を挙げていない。このバポージャヴ本人の呈文からは、「博王旗の権力者」というのがボドルガタイ親王旗のアルホア公であって、しかもアルホア公に召募されて、フレーに向かっ途中、営長に任命されたことが知られる。この事実は、アルホア公が彰武県の巡警局長であったバポージャヴとボグド・ハーン政権を結びつける役割を果たしたことを示している。

ところで、この呈文は11月23日（1912年12月31日）にボグド・ハーン政権に呈上されており、バポージャヴが自分の所属旗や彰武県で巡警局長だったことを自己紹介していることから、おそらく彼がボグド・ハーン政権に呈上した初めての文書であり、しかも、この時点では、彼自身が既にフレーにいたものと考えられる。一方で、見栄えは、日本側が把握していた情報では、バポージャヴは新暦の9月初めに彰武県から洮南方面のウタイ王の蜂起に加わるために逃走して、10月初め頃に鎮東県に現れ、11月の開魯の蜂起に一頭領として参加していたとされている。呈文には、彰武県から出発したのが、ウタイ王の蜂起に加わるためではなく、ピント王旗を目指して、そこでアルホア公に会って、フレーに来たと述べていて、開魯の蜂起に関し
ては、言及がない。

もし日本側の情報に見るように、「ポーポーヴィヤェバがアルホア公とともに、一頭領として内モンゴル開蒙県での蜂起を起こしたとすれば、彼らは蜂起の失敗後にフレーに赴いたはずである。日本側の情報によると開蒙県の陥落は新暦11月15日とされているが、ポーポーヴィヤニの呈文は新暦12月31日付であることから、彼が内モンゴルでの蜂起失敗後にフレーに向かったとしても矛盾はない。またこの呈文によれば、ポーポーヴィヤは9月には既にアルホア公と合流しているから、アルホア公の動向がわかったので、ポーポーヴィヤの動向も解明できるだろう。

4-2 アルホア公の呈文に見えるフレーに到着時のポーポーヴィヤ

そこで次に、共戦2年冬中月22日（新暦1192年12月30日）付のボグド・ハーン政権の内務省より総務省に送られた文書を取り上げたい。この文書は、アルホア公ナスンアルビジラが南方より招勧してきた兵士らへの恩賜を請願したことを伝達した文書（注16）である。これによれば、今年冬中月初8日（新暦1192年12月16日）内務省より附件を付けて上奏した件

今年の夏初月軍務省副大臣ビシレルト見子ナスンアルビジラが命令に従って、南方边境を安定させるため一干の兵士を招勧して首都フレーに来させようという命令に従って、該大臣見子ナスンアルビジラ本人を南方へ駅駒により出発させた。現在大臣見子ナスンアルビジラ本人の招勧してきた1千の兵士の内、先に入士300名が特に官員に管轄されてともに首都フレーにすでに到着した。このため、弟子たる奴才らが伏して思うに、大臣見子ナスンアルビジラが上諭に従い、南方より招勧した1千名の兵士らより300名余を選んで、家族をつれて、首都フレーに来て、国家を守るために安置したこと、国の政治に誠を尽くし、家と土地を捨ててきた故郷からやってきたことは、二心無きことを示し尽くしたものであるといえよう。また、彼が召集してきた官兵が遠方よりボグド・ハーンの諭旨と慈悲を信奉し、文化に帰化し、おおいなる国政に力を尽くそうと自ら進んで来たことは真に賞賛すべきことである。よろしく伝達上奏し、官兵達を指揮する属下の大臣見子ナスンアルビジラをはじめとする官員達に恩を施し、賞賛して尽くそうとする心をさらに一層深くさせるべきであるが、弟子たる奴才らのほしいままに処理する事ではないので、謹んで附件を書き、彼ら官員の名簿とともに進呈上奏し、ボグド・ハーンの照栄を賜りたい。これゆえに謹んで上奏した。

とあり、冬中月初8日（新暦1192年12月16日）にアルホア公ナスンアルビジラ及び彼に招勧されてきた300余名の兵士らがフレーに既に来ており、これらの官兵に賞賛をするようにボグド・ハーンに請願している。この請願は、

上奏したところ、同月の初日受領した同附件に記された朱批に、ナスンアルビジラは誠に尽くすためにやってきた兵士らを召集してきたのが、誠に賞賛すべきであるので
ボグド・ハーン政権成立時の東部内モンゴル人の動向

で、世襲固有山貝子品級を賜与せよ。他の官員らに賜与する恩賜を別に付記に記し、謹んで従ってこれを軍務省副大臣ブンシルェト貝子ナスンアルビジフに命じ送って、上奏した件、下された論旨に謹んで従って送付しよう…

共戴二年 冬中月22日（1912年12月30日）

とあり、11月8日（新暦1912年12月16日）に上奏が行われ、翌9日に朱印が下され、これを同月22日（新暦12月30日）に総務省など五省とナスンアルビジフに伝達したものであることがわかる。ここから、バポージャヴは、ナスンアルビジフとともに11月8日（新暦12月16日）以前にフレーに到着していることが知られる。この文書は以下のような召集した兵士の名簿が添付されている。

名单

南方より召集してきた兵士
総務 総務台吉 ポヤンアルビジフに頭等頂子花翎
印務 メイン・トゥヴァ門子に二等頂子花翎
筆頭筆帖式三等侍衛テグスパバル、ボムパラに二等頂子花翎
南方宮長メイン・バポージャヴに二等頂子花翎
東方宮長ジャラン・ムルンガに二等頂子花翎
西方宮長メイン・ジトグルトに二等頂子花翎
北方宮長メイン・ガダルルに二等頂子花翎
五十名兵士班長 花翎三等台吉ジャトに二等頂子
同副等待衛 バトビリクトに三等頂子花翎
同五等 オラガル、シャラ、マンドフ、ジャルンガ、ダルチ、チョルヴァイらに五等
頂子
五十名班長協理四等台吉 ウルジオロシフ、ジャムソ、ダムリンジャヴ、ダムツォグ、
タイシ、ヒュシェンカラに六等頂子
六等 エルデニアグラ、ハスパートルに五等頂子
軍糧を管理する官吏メイン・ヒュシェンカ、ユウラン、軍の総巡察 四等台吉 イバ、
イバ、五等チンドバラ、ボムパ、ボンツォグ

ここには、たしかに南方宮長としてバポージャヴの名が見える。このようにバポージャヴは
9月中旬にアルホア公と合流し、12月16日までにフレーに到着したことが判明する。その9月
から12月までの3ヶ月間に、日本側情報が伝えるように、関東県の蜂起に一頭領として参加し
ていたことは十分にありえるだろう。

また、従来の研究では、ジョンジュールジャヴの回想録に基づき、バポージャヴがフレーに
赴いて、途中2000余名の兵士を集めて、フレーに到着した後、ボグド・ハーン政権に鎮国公に
封じられたという。しかし、この文書及び前掲のバボールジャヴァ本人の呈文によれば、彼が彰武県からピント王旗を目指した時に率いていた兵は60余名であり、ピント王旗で30余名を加えた結果90余名となったとされている。またアルホア公が率いていたバボールジャヴァを南方営官とする四営の兵は300余名であり、たとえ文書にあるように1千名の兵を集めたとしても、従来のジョンジュールジャヴァの回想録にあるようにバボールジャヴァだけで2000余名の軍隊を連れてフレーに到着したということは考えにくい。

また、バボールジャヴァがフレーに到着してすぐ鎮国公に封じられたという問題に関しては、ジャムサラン氏は、「…バボールジャヴァが軍隊を率いてフレーに到着したときにポグド・ハーンと他の権力者らは彼に感謝して、歓迎して、鎮国公に封じた」 [ラ・カムサラン 1996:57] とし、バボールジャヴァが1912年11月のフレー到着後、鎮国公に封じられたとしている。ただ氏は根拠を示していない。

これに対してロンジョ氏は、バボールジャヴァがポグド・ハーン政権に尽くすこと願い出た前掲の呈文を示すのみで、バボールジャヴァがフレーに到着した時点で直ちに鎮国公に封じられたとは述べていない。

上掲のアルホア公ナサンアルビジフによる召募官兵らの賞与請願文書に附された官兵の名簿では、アルホア公ナサンアルビジフに世襲罪実所属を報し、南方営営長メイレン・バボールジャヴァには二等頂子・花翎が授与されているのみで、彼が世襲鎮国公に封じられたとは記されていない。これらの文書から、1912年12月にアルホア公の営長としてフレー行ったバボールジャヴァが、その時点で鎮国公に封じられていなかったことは明らかであろう。

ところでジャムサラン氏は、フレーにおけるバボールジャヴァの動向について、「モンゴル国が彼の努力をこのように評価したことに、メイレン・バボールジャヴァは非常に感激し、1912年11月にポグド・ハーン政権の総務省に…「ただに我々の兵士達をわれら二人（もう一人の営長メイレン・ジトグルト）にとくに指揮させて、敵に対して出陣させ、力を尽くし忠誠心を遂ぎさせるましょう」と呈出した…」 [ラ・カムサラン 1996:57] (注17) と述べている。これはアルホア公の一営長としてフレーに来たバボールジャヴァが、アルホア公からの自立を図ったものである。しかし、ジャムサラン氏はこの請願の経緯についてこれ以上の検討を加えていない。

4-3. バボールジャヴァの自立

そこで次に、ジャムサラン氏が引用した文書、すなわち共載2年11月30日（新暦1913年1月7日）付の「メイレン・ジトグルト、バボールジャヴァ達それぞれの本心はポグド・ハーンのために犬馬の労を尽くすように決心したこと、また兵士達と共に敵に向かって出陣しようとそれぞれ呈出したことを書き写し、本請願どおりに行わせしめるよう論旨を請い上奏する摂子の稿」の題記のある輔弼大臣セウェン・ハン・ナ（ナワーンネレン）、御前大臣・総理大臣サインノヤン（ナムナンスレン）、副大臣ピント親王ゴ（ゴンチグスレン）の奏文（注18）を用いて、
この問題を検討したい。この文書はモンゴル国立中央アルヒーフの総務省フォンドの1912年「本省が送った上奏文及び他省から送られてきた奏摺等を記録した査冊」（tus yamun-aça garyagysan ayiladqal-ud-un eke busud yamun gajar-ud-tu yabuyuluyun ba iregsen biçig-ön temdegetlii dangsa）という題目がつけられた査冊に収録されているものである。査冊は全185ページ、縦27.5cm、横26cm、厚さ2.5cmであって、本文書は23頁から33頁までに収録されている。

この上奏文によれば

上奏すること、ジリム盟副大臣ピント親王ゴ、ジョクト盟トゥメド左翼旗王等のメイレン・ジトグルト、バポージャヴァらそれぞれ管轄下の兵士を率いて、政府に力を尽くすと次々に呈文を呈出したことを謹んで摺子を書き、上奏して、ボグド・エジエンのご照覧を請う件。現在、ジリム盟のジトグルト、また、ジョクト盟長トゥメド左翼王旗のメイレン・バポージャヴァよりの呈文に…

として、バポージャヴァ本人の呈文（上述したバポージャヴァ本人の呈文）とジトグルトの呈文、及び別に提出された両人連名の文書を引いている。その内、両人連名の文書に、

ボグド・ハーンの明瞭なる論旨が下されたのになじんで従い、管轄下の兵士達を教え導いて、従って従わせる外、卑小な我等二人の管轄下の兵士の数は併せて二百名近く、もともて遠方から首都フレーに来て、ボグド・ハーンの盛んなる文化に帰化し、さきやかりとも力を尽くそうとしたのみで、銭糧の優遇を受けて安楽に生活したかったわけではない。ただ一つ請うらくは、貴省より卑小なる私の忠誠な心をお認めになり、我々の兵士達を二人とにくに指揮させて、敵の出陣させ、いかに力を尽くさせ、忠誠な心を実現させられたいと呈した、

と見え、バポージャヴァらがフレーに来た目的を表明し、自らの管轄下の兵士を独自に指揮させると請願していたことが知られる。つまりバポージャヴァはアルホア公の南方官長としてフレーに来たものの、それに満足せずにアルホア公の管下より自立しようと図っていたことが知られるのである。これに対してナワーンネレン等は、

ここで奴才共に伏して思うに、メイレン・ジトグルト、バポージャヴァならばこのようにそれぞれの管轄下の兵士達を自ら指揮し権威に力を尽くさんとしており、また、全兵士達に論旨により与えるように定められた銭糧をそのとおりに授けようということは、真に理にかなっており、また管轄下の兵士達を諸事に従わせ指揮できるようであるので、ただに請うたとおりに行わせてもよいが、弟子たる奴才達がほしいままに処理することではないため、原呈文をそのまま書き写し謹んで摺子を書き、上奏し、請うらくは、ボグド・ハーンがご照覧になり、教え論されたい。これゆえに謹んで上奏した。論旨を請う。

共戴二年十一月三十日（1913年1月7日）

— 114 —
との判断を下し上奏した。それではパボージャヴは結局アルホア公より自立できたのであろうか。共戴2年冬末月15日（新暦1913年1月22日）、アルホア公ナスンアルビジフが総務省に「我が徴募してきた軍の長パボージャヴらは自分の管轄下の兵士らを分離させて管轄しようと言うのを、その通り認めた」との文書（注19）を呈しており、パボージャヴがアルホア公の管轄下の一営長から自立できたことが伺われる。

その後、パボージャヴは自分の部下とともに1913年のボグド・ハーン政権が内モンゴルに五方面軍を派遣したとき、東南方面軍の指揮官として派遣されたのである。内モンゴルに戻ってきたパボージャヴは現地で徴募を行い、1915年の時点では既に2000名以上の兵士を擁するようになっており、その兵士らの殆どが東部内モンゴル人であった。ボグド・ハーン政権は彼を「東南辺境モンゴル人鎮撫官兵総管大臣ショルドゲ・バートル世襲鎮国公」に任命した。

ボグド・ハーン政権は中露宣言によって、1913年末に内モンゴルから軍を引き揚げざるを得なくなったが、パボージャヴは内外モンゴルの境界地方にとどまった。このパボージャヴ軍は、辺境に度々騒擾を引き起こしていると、当時、ボグド・ハーン政権と中華民国の間で問題になっていた。実際、この頃のパボージャヴはボグド・ハーン政権の東南辺境において大きな権力と2000名以上の兵士を有していた。この兵隊は、ボグド・ハーン政権にとって膨大な数であった。この頃パボージャヴが握っていた権力及び軍隊の構成については次の課題としたい。

**まとめ**

本稿では、近代モンゴル独立運動史上、古くから日本、中国、モンゴルで注目されてきた東部内モンゴル・ジョット盟トゥメド左翼旗出身のパボージャヴの活動を日本外交文書及びモンゴル国立中央アルフープ文書を用いて、これまで注目されてこなかったフレー行の経緯を明らかにすることを試みた。

従来、パボージャヴのフレー行に関しては、外モンゴルの独立を聞いて、それに加わるため彰武県からフレーに逃走したとされている。しかし、彼はジョット盟の旗民であるが、盟旗の行政組織ではない奉天管轄下の彰武県の巡警局長であり、諸盟旗ジャサグ宛の合流の檄文がパボージャヴには届けられていたとは考えにくく、またそのようなパボージャヴが自らフレーに赴いたことにより直ちに「歓迎と歓待」を受け、鎮国公に封じられたという従来の理解は受け入れがたい。

このような疑問を出発点としてパボージャヴのフレー行の経緯を検討した結果、彼はフレーにおける独立運動に呼応して直接フレーに赴いたのではなく、まず、ビント王旗に立ち寄って、そこで、ボグド・ハーン政権の命令により内モンゴルで兵を徴募していた博王旗のアルホア公ナスンアルビジフに召募され、アルホア公率いる軍の南方方面営長となって開魯での蜂起に参加し、1912年12月中旬頃にフレーに到着したということが明らかとなった。

— 115 —
ポグド・ハーン政権成立時の東部内モンゴル人の動向

ポグド・ハーン政権とバポージャヴァの間の接点となったのはこのアルホア公ナスンアルビジフだったのである。彼は、内モンゴル・ジリム盟三旗の王公を代表してポグド・ハーン政権に帰順書を届けた人物であったが、橘氏（橘誠2007:160）により明らかにされている。バポージャヴァはアルホア公ナスンアルビジフの一官長となることによって、はじめてフレーのポグド・ハーン政権に認められ、その後自立してポグド・ハーン政権の指揮官になって内モンゴルに戻ってきたのであった。

注
（1）『モンゴル帝国史』は1925－1927年にマグサルジャヴァが作成した。1994年にバトサイハーン氏、ロンド氏がハラル文字で刊行したものを利用した。この内モンゴルの合流問題に関しては近年ジュルゲン・タイプン（2001）、橘誠（2005）、汪炳明（1996）らが研究論文を発表している。
（3）ポグド・ハーン政府時代に関わるものとして、『モンゴル上下院史料集』 “Монгол улсын дээд доод хурал，Баримт бичигий эмхээгэл (1914－1916)” UB 2003三冊、『20世紀モンゴル史料第111－1921』 “Хөрдочуу адуу монголтын түүхийн эх сурвалж (1911-1921)” UB 2003、等を挙げることができる。
（4）「アジア歴史資料センター」は2001年に開設されたhttp://www.jacar.go.jp/ホームページで外務省外交史料館、国立公文書館及び防衛省防衛研究所図書館が所蔵する文書が公開されている。
（5）陳鍾『止室筆記』近代中国史料叢刊第十七輯文海出版社1968、72頁。
（6）外務省外交史料館。一門政治/6 類「諸外國内政」蒙古情報第二巻 大正元年 9月26日から大正元年10月9日 0006。
（7）外務省外交史料館。一門政治/6 類「諸外國内政」蒙古情報第二巻明治45年1月10日から大正1年12月3日 0201-0202。
（8）外務省外交史料館。一門政治/6 類「諸外國内政」蒙古情報第二巻 明治45年1月10日から大正元年12月19日 0400。
（9）外務省外交史料館。一門政治/6 類「諸外國内政」蒙古情報第二巻 明治45年1月10日から大正元年12月3日 0200。
（10）外務省外交史料館。一門政治/6 類「諸外國内政」蒙古情報第二巻 明治45年1月10日から大正元年12月3日 0198－0199。
（11）外務省外交史料館。一門政治/6 類「諸外國内政」蒙古情報第1巻 明治44年9月28日から明治45年4月18日、件名「蒙古王及び喇嘛／行動」0094－0095。
（12）外務省外交史料館。一門政治/6 類「諸外國内政」蒙古情報第1巻 大正元年9月1日から大正元年9月23日 0409。
（13）外務省外交史料館。一門政治/6 類「諸外國内政」蒙古情報第2巻 明治45年1月10日から大正1年12月3日 0203。
（14）外務省外交史料館。一門政治/6 類「諸外國内政」蒙古情報第2巻 大正元年11月29日から大正元年12月19日 0246－0248。
参考文献

（日本語）

王希亮 1993 「満蒙独立運動と大陸浪人」『金沢法学』35 (1, 2), 115－139頁。
柏原孝久、濱田純一 1919 『蒙古地誌』上巻。

黑龍會 1966 『東亜先覺志士紀傳』、中、原書房。
ジュリゲ・タイプン 2001 「1911年のボゴド・ハーン政権に帰順した内モンゴル旗数の再検討」『モンゴル研究』19, 21－30頁。

橘誠 2005 「ボゴド＝ハーン政権の内モンゴル統合の試み－－ザリーンゴル盟の事例として－－」『東洋学報』87 (3), 63－94頁。

橘誠 2007 「20世紀初頭の内モンゴル東部地域の社会構造－－ジリム盟、庫諾ス系の事例から」アジア地域文化学叢書8『近現代内モンゴル東部の要因』雄山閣、157－183頁。

中見立夫 1976 「ハイサンとオタイ＝ボゴド・ハーン政権下における南モンゴル人」『東洋学報』57 (1, 2), 125－170頁。

波多野勝 2001 『満蒙独立運動』PHP新書。

ポルジギン・ブレンサイン 2007 「ハラチ＝トメド移民と近現代モンゴル社会」アジア地域文化学叢書8『近現代内モンゴル東部の変容』雄山閣、318－345頁。

（中国語）

白拉都格其、金海、賽航 2002 『蒙古民族通史』第五巻（上）、275-283頁。

陳錦 1968 『止室筆記』近代中國史料叢刊第十七輯、文海出版社。
盧明輝 1979
『巴布札布史料選編』中国蒙古史学会。
汪炳明 1996
「關於民国初年表示外蒙古哲布尊丹巴政府的內蒙古盟旗王公」『蒙古学信息』1、36－38頁。
正珠爾扎布（ジョンジュールジャヴァ） 1984
「巴布札布事略」『内蒙古文史資料』14、184－188頁、中国人民政治協商會議內蒙古自治区委員会文史資料研究委員会。

[英文]
Nakami, Tatsuo 1999

[モンゴル語]
Жамсран, Л. 1996
“Монголын цагаан чин гохой жилийн хувьсгал”, Улаанбаатар.
Лонжил, З. 2002
“Шудрага баатар Бабуужаб”, Улаанбаатар.
Магсаржав, Х. 1925-1927
“Монгол улсын шинэ түүх”, Улаанбаатар.
Пунцигноров, Ц. 1955
“Монголын автономит үеийн түүх”, Улаанбаатар.